

ディケンズと精神的外傷

吉田 一穂

序

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)は1812年2月7日にイギリス南部の軍港ポーツマス(Portsmouth)近郊のランドポート(Landport)で生まれた。父親ジョン・ディケンズ(John Dickens)は海軍省経理部の下級官吏であったが、生活は常に貧しかった。ジョンは、経済観念がなく、万事派手なことが好きで、友人を集めて大盤振舞をしたり、慈善の目的の寄付集めなどがあれば、自分が近隣で最高の額を出さなければ気がすまないといった見えっぱりだったからである。父親の勤めの関係で1814年に一家はロンドンに移り、さらに1817年にロンドンの南方約40キロにあるチャタム(Chatham)に移り、1822年にロンドンに戻るまでここにいた。ロンドンに戻ってから一家の生計はますます苦しくなった。母エリザベス(Elizabeth)が女子のための塾を開こうとし、それを告げるビラを配らされたこともあったが、入学希望者は一人も現れなかった。家具や書物も売り払われて家の中は空洞になり、なお残ってくる細かな品物を次々に質屋に運ぶのもチャールズの役割であった。ついにチャールズは靴墨工場へ働きに出されることになった。1824年2月9日のことで、チャールズは12回目の誕生日を迎えて2日たったところであった。勉強してりっぱな紳士になるのだという少年の夢は無残に破れ、彼は朝から晩まで野卑な少年たちと共に靴墨をびんに詰め、包装し、紐でしばるという単調な仕事に従った。靴墨工場での体験は、ディケンズにとって絶望感を与える経験以外の何物でもなかった。高名になり、幸福になった後でさえ、しばしば彼は夢の中で、妻や子供のあることも、自分が大人であることさえ忘れ、生涯の絶望に満ちた時期へと迷い込んだのである。

その後間もなく父親は借財不払いのためマーシャルシー(Marshalsea)監獄に入れられた。マーシャルシー監獄は、借金をしたり、商人から品物をつけで買って約束の期限に払わなかった者の入れられる監獄で、しかも家族も希望すれば一緒に入れることになっていた。主人に生活能力がない以上、家族は放って置かれれば餓死するよりほかないからである。ディケンズ一家はチャールズ以外全員ここに入った。チャールズだけが外に粗末な部屋を借りて靴墨工場へ通っていたが、夕食はマーシャルシーで家族とともにした。3か月ほどして父親に少しばかりの遺産が入ったので一家は監獄を出、チャールズも間もなく工場をやめることになった。父親が工場の経営者と喧嘩したのが原因であった。このとき母親が、せっかく収入になるのだから工場の仕事を続けるようにと主張し、経営者の所へ謝りに行ったことが、チャールズの心に母親に対する深い失望感をいだかせることになった。チャールズは、母親が工場に戻ることを熱心に勧めたことを、その後決して忘れなかった。忘れようにも忘れられなかったのだ。

チャールズが工場で働いた期間は数ヶ月であったが、このときの屈辱と絶望は彼の心に生涯精神的な外傷(trauma)となって残った。精神的な外傷とは、外的内的要因による衝撃的な肉体的、精神的ショックを受けた事で、ある人間の中で長い間心の傷となってしまうことを指す。外傷体験(traumatic experience)とも言う。発達上のトラウマに関して付け加えておくと、悲痛であったり、恐怖を覚えるような情動というのは、それに耐えたり、それを抑えこんだり、あるいはそれを自らの情動に対する周囲の調律が深刻に欠如しているときに、その情動は外傷的なものとなるのだ(Stolorow 5)。精神的な外傷が精神に異常な状態を引き起こすと PTSD(Post-traumatic stress disorder、心的外傷後ストレス障害)となる。症状の持続期間が1～3カ月ならば、急性 PTSD、3カ月以上ならば、慢性 PTSD となる。¹ 心的外傷は脳神経系へのダメージがあるので、強姦など精神的な外傷を伴う犯罪は、一般の障害罪よりも重罪であるという考えが特に海外では増えてきている。典型的な精神的な外傷の原因は、幼児虐待や児童虐待を含む虐待、強姦、戦争、犯罪や事故を含む悲惨なできごと、実の親による DV、大規模な自然災害などである。症状の目安としては、成人であっても幼児還り現象が見られることである。

ディケンズと精神的な外傷を考えると、忘れてはならないのが 1869 年 6 月 9 日のステイプルハースト(Staplehurst)での鉄道事故である。ディケンズは 1865 年フランスで *Our Mutual Friend* (1865) の第 16 号の第 2 章に取り組んでいて、終わりに向けて書き進めていた。ターナン(Ternan)夫人とエレン・ターナン(Ellen Ternan)とともに、彼はブローニュ(Boulogne)からフォークストーン(Folkestone)へのフェリーに乗り込んだ。その後、フォークストーンからロンドンまで行く列車に乗った 3 人は、一等車の座席に座っていたが、列車は修理作業が行われている川の上の高架橋に近づいていた。時すでに遅しであった。列車は、時速 20 マイルから 30 マイルの間のスピードで壊れた線路に近づき、鉄道線路からはずれた。7 つの全ての一等車は、下に落ちた。列車はレールからはずれ、今や橋の上で傾き、そのためディケンズもターナン夫人もエレンもすみの方に押しやられたのであった(Ackroyd 1012-13)。彼らは無傷で助かったが、10 人の死者と 20 人の負傷者が出、ディケンズは大変なショックを受けた。彼は、この事故から完全に立ち直れず、馬車の旅をするのさえひどく怖がるようになった。日本でも 2005 年 4 月 25 日 JR 福知山線尼崎駅、塚口間で発生し、107 名の死者を出した JR 福地山脱線事故が記憶にあたりしが、事故では負傷しなかった同列車の乗客や救助作業に参加した周辺住民なども PTSD を発症した。ステイプルハーストでの鉄道事故

においても、ディケンズの精神的なショックは大変なもので、彼もまた今日であれば PTSD に近い症状と判断されたかもしれない。

事故の場合比較的、精神的な外傷は確認しやすいが、人生の初期に体験した精神的なショックによる精神的な外傷は確認しにくい場合がある。ディケンズの場合、家族と離れて靴墨工場で働かなければならなかったこと、また、母親が靴墨工場に留めておこうとしたことが、彼の心の奥底に残っていて、精神的な外傷となったと推察される。本論文では、主に *Little*

Dorrit (1857)と *A Tale of Two Cities* (1859)を取り上げてディケンズの精神的外傷の影響がどのように作品に表れているかについて考察してみたい。

1. *Little Dorrit*に見られる影響

Little Dorrit において、ディケンズは、辛い過去ではあったが、自身の過去をうまく利用し、作品に取り入れている。アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)は、父親に対するリトル・ドリットの誠実さが、子供時代のチャールズが、深く愛していた父親に対して示したかった役割にほかならない、と考えている。また、ウィルソンは、その役割を鉄の扉の外の冷たい世界で、ひそかに人生を耐え抜く孤独な、見向きもされない少年としてではなく、むしろ鉄の扉の内側で、暖かい芝居気のある雰囲気の中に混じって、父親の傍にいる小さな勇気のある少年としての役割と考えている(Wilson 54-57)。自伝的部分から靴墨工場の消し去りがたい記憶により、ディケンズが自身の願望をエイミー(Amy=Little Dorrit)に表現したと十分考えられる。

ボブ・フェイギン(Bob Fagin)は、消防士を父親に持つポール・グリーン(Paul Green)とともに、ディケンズの靴墨工場における仕事仲間であり、孤児であった。ディケンズは、彼らとは、自身が行儀、作法の点で異なり、“the young gentleman”と呼ばれていたと主張している。ボブは、ディケンズに対し優しく思いやりのある人物であったようだが、ボブの存在そのものは、ディケンズにとって感謝以上に恐怖を呼び覚ます存在であった。その恐怖とは、自身もまた貧乏人の仲間入りをしてしまうのではないかという恐怖であった。このような環境にあってディケンズは、自身は環境は恵まれなくとも“gentleman”なのだと思心の中で強く叫んでいたにちがいない。しかし、ディケンズの紳士なんだという意識は極めて素晴らしいものであったであろう。それは、ちょうどウィリアム・ドリットが監獄の中で持つ意識と似ている。ウィリアムは、マーシャルシー監獄の父として監獄の中で生活しているが、その称号は極めて不確かな基盤の上に立つものである。マーシャルシー監獄への新入りは全員ウィリアムに引き合わされ、ウィリアムは謁見を行う。そして、同宿人が監獄から出るとき、しばしばお別れの挨拶と手紙と金を受け取る。ウィリアムが受け取る金は、半クラウン銀貨一個、あるいは二個、ときには、半ポンド金貨であったりする。彼はこれを、名士に対する崇拜者の献上品として受け取る。しかし、入れ替る家族の献上品に頼りきる度合が増すにつれ、ウィリアムは一層おちぶれた紳士意識にしがみつこうようになる。このようなウィリアムの苦しみや悩みを理解し、思いやりをもって接するのがエイミーである。

ウィリアムとエイミーの関係は、本来は保護者と被保護者の関係のはずであり、ウィリアムもそう思い込んでいるが、作品ではその関係は実際のところ逆転してしまっている。エイミーがクレナム夫人の家で、裁縫の仕事をしていることを知り、関心を持ったアーサーは、第1巻第8章でウィリアムの弟のフレデリック(Frederick)にエイミーのことを尋ね

る。それに対しフレデリックは、エイミーが自身の姪であると言い、姪が針仕事をやっていることを口に出さないで欲しいと言う。ウィリアムをかばうような態度は、フレデリックにのみ見られるわけではなく、エイミーにも見られる。エイミーは、父親のことを皆から大いに尊敬されていると言うだけでなく、次のように言って父親の弁護をしている。

‘It is often said that his manners are a true gentleman’s, and quite a study. I see none like them in that place, but he is admitted to be superior to all the rest. This is quite as much why they make him presents, as because they know him to be needy. He is not to be blamed for being in need, poor love. Who could be in prison a quarter of a century, and be prosperous!’ (97) ²

エイミーが父親をかばうことは、かつてディケンズが靴墨工場で感じた「自分は紳士なんだ」という気持ちを弁護しているかのようである。

エイミーは、友人のマギー(Maggy)に「小さなお母さん」(‘Little mother’)と呼ばれている。二人の関係はエイミーと父親の関係を暗示しているかのようである。マギーは10歳のときにひどい熱病にかかって、それ以来成長が止まってしまっている。また彼女は、実際は28歳くらいなのであるが、精神的にはエイミーを母親と慕っている。第1巻第9章で、アーサーはマーシャルシー監獄の門番小屋の入口に二人が入っていく姿を見て、大きな子供を連れた小さな母親のように思う。監獄の中の父親とエイミーもまた、実際のところは子供と母親の関係と言ってよかろう。第1巻第14章で、アーサーはエイミーが自身のことを‘my child’ と呼ばれ、彼女の顔に悲しそうな影がさすのを見る。エイミーの表情の変化に気づいたアーサーは、これからは「リトル・ドリット」と呼ばせてもらうと言う。彼の言葉に対しエイミーは、「ありがとうございます。その名前が何よりもいちばん好きです」(167)と言い、自身が「リトル・ドリット」と呼ばれたがっていることを明らかにする。その後、アーサーが訂正して「リトル・ドリット」(167)と呼ぶと、そのときまで寝むっていたマギーが「小さなお母さんよ」(167)と訂正を入れる。エイミーは「小さなお母さんよ」と言ったマギーに対し、「マギー、どちらでも同じよ」(167)と言う。エイミーの言葉にディケンズの意図が読みとれる。ディケンズは、実際には22歳であるエイミーが保護者的側面を持っていて、マギーだけでなく、自身の父親に対しても母親のごとき役割を果たしていることを読者に印象づけているのであろう。この箇所‘little’ という形容詞は、12、3歳に見えるという事実だけでなく、実際には自分より年上の人間の母親となっていることを強調するためにディケンズが意図的に用いたと考えられる。エイミーの「小さな母」(‘Little mother’)としての側面は、第1巻第19章によく現れている。才能もあり、美男子であり、独立した人間であったかつての自分とお情けと残飯にすがるで生きている哀れな囚人である今の自分を比べ、自己憐憫の涙にくれたウィリアムは、娘の言いなりになって娘に抱かれ、面倒を見てもらい、白髪頭をその頬にもたせかけ、わが身の不幸をめそめそと

嘆く。ディケンズは、エイミーとウィリアムの関係を次のように描写している。

There was a classical daughter once—perhaps—who ministered to her father in his prison as her mother had ministered to her. Little Dorrit, though of the unheroic modern stock, and mere English, did much more, in comforting her father's wasted heart upon her innocent breast, and turning to it a fountain of love and fidelity that never ran dry or waned, through all his years of famine. (229)

この箇所には父親の母親となったエイミーの姿が窺えるだけでなく、ディケンズの過去を埋めあわせたいという願望が窺える。すなわち、母親が靴墨工場にとどめて置こうとしたことに対し、本当は愛情が欲しかったのだという潜在的願望を小説に描き込んでいると考えられるのだ。このような自伝的部分を感じさせる部分は、アーサーとエイミーとの関係にも読み取れる。第2巻第29章に、破産し、マーシャルシー監獄に入っているアーサーをエイミーが訪ねる場面がある。アーサーは、エイミーのことを「やさしくて、忠実で、金の力に毒されていない」、「声音も、目に輝き、やさしい手も、まさに真実と安らぎの天使そのもの」(756)と感じる。注目に値することは、エイミーがアーサーを救い出し、彼の過去の辛い思い出を洗い流す役割を果たしていることだ。

ところで、ディケンズの記憶の中で精神的外傷を考えると、忘れてはならないことは、彼の初恋である。1829年にディケンズはマライア・ビードネル(Maria Beadnell)という女性に会い、たちまち恋に落ちた。彼が17歳のときであった。マライアは銀行家のジョージ・ビードネル(George Beadnell)の三女で、当時しがたい速記記者だったディケンズに比べて、彼女の家のほうがはるかに格が上だった。初めのうちこそ彼は足しげく訪問したが、やがて歓迎されぬ客となった。マライアの親たちは、彼の父親の生活無能者ぶりについて聞いて知っていたらしい。1813年の末にマライアは勉強のためと称してパリに送られ、再び帰ってきた後の彼女はディケンズに対してすっかり冷たくなっていた。彼は公然と文通することも許されなくなったので、両人の共通の友人に託してマライアに盛んに手紙を届けた。しかし、この恋は実らず、1833年の中ごろディケンズは彼女から身を引いた。マライアは彼から去っていったが、これには後日談がある。22年後、マライアからディケンズ宛の手紙が来たのである。彼はすでに世を圧倒する大作家であり、マライアはヘンリー・ウィンター(Henry Winter)という商人と結婚し、二女の母となっていた。ディケンズは大きな期待を持って彼女に会ったが、会った後の彼は急に冷淡になり、二度と彼女の会おうとはしなかった。マライアは明らかにディケンズを失望させたのであった。彼女は肥満し、散漫な話にうち興ずる退屈な女性になっていたのである。ディケンズは、このときの体験を*Little Dorrit*において再現している。*Little Dorrit*において、ディケンズはフローラ・フィンチング(Flora Finching)を「この前別れたユリだと思っていたフローラは、いまやボタンになってしまった。しかし、そんなことは大したことはない。かつて言うことなすこと

魅力にあふれていたフローラは、いまや取りとめなく、愚かな女になってしまった」(150)と描写している。アーサーのかつての恋人フローラ・フィンチングに対する失望は、あたかもディケンズのマライアに対する失望を再現しているかのようである。マライアとの恋愛で重要なことは、彼の失恋に家柄や父親の素行も関係していることである。このことは、ディケンズの過去の忘れ去りたい記憶、すなわち、マーシャルシー監獄と靴墨工場の記憶を呼び覚ましたにちがいない。

後にディケンズは、自身のトラウマとその影響について認識する機会を得た。それは、アメリカ旅行の際、フィラデルフィアを発つ前日訪れた、郊外の「東部刑務所」(Eastern Penitentiary)においてであった。アメリカは当時から、犯罪者の扱いに関しては世界の先進国とされていて、トクヴィル(Alexis de Tocqueville, 1805-59)を始め多くの見学者、調査団がこの「東部刑務所」そしてオーバン(Auburn)、シンシン(Sing Sing)などの刑務所を訪れている。なかでもとりわけ注目を集めたのが、セパレート・システム(分離方式)もしくはペンシルバニア方式として知られた独房による囚人管理の形態をとる刑務所であった。アメリカでは早くから刑務所の改善が進められたが、犯罪者をただ収監するというのではなく、改革の先駆的英国のジョン・ハワード(John Howard, 1726-90)の主張にそって‘penitent’ (悔悟) させるのを目的とした刑務所の設置が模索されていた。³ そんな折、クウェーカー教徒の社会改革者たちの努力が実り、1790年、フィラデルフィアのインディペンデンス・ホールの後にあった小さな町の留置所——ウォールナット・ストリート留置所を、州に働きかけ、悔悟(penitent)させることを主眼とした刑務所(penitentiary)にすることに成功した。セパレート・システムはそこで実行に移されたシステムである。このシステムでは囚人は昼も夜も常に独房に入れられていて、唯一の例外は、独房に隣接した庭で運動が許されるときぐらいで他の囚人と交わることは全くなかった。ディケンズが訪れた「東部刑務所」はこのシステムを取り入れた刑務所で1830年に建てられた(川澄 114)。

ディケンズは、*American Notes* (1842)において監禁状態に追いやられた人間の精神状態について描写している。第7章「フィラデルフィア、およびその孤独な監獄」(‘Philadelphia, and Its Solitary Prison’)は、東部重罪監獄について書かれてある。ディケンズは、この監獄が絶望的な独房監禁に人々を追いやり、その効果について残酷かつ誤ったものであると考え、次のように述べている。

In its intention, I am well convinced that it is kind, humane, and meant for reformation; but I am persuaded that those who devised the system of Prison Discipline, and those benevolent gentlemen who carry it into execution, do not know what it is that they are doing. I believe that very few men are capable of estimating the immense amount of torture and agony which this dreadful punishment, prolonged for years, inflicts upon the sufferers; and in guessing at it myself, and in reasoning from what I have seen written upon their faces, and what to my certain knowledge

they feel within, I am only the more convinced that there is a depth of terrible endurance in it which none but the sufferers themselves can fathom, and which no man has a right to inflict upon his fellow-creature. (99)⁴

このように述べた後でディケンズは、頭脳という神秘に干渉することは、身体に加えるいかなる拷問よりも計り知れないほど悪い結果を生むものであると思う、と訴えている。その理由をディケンズは、表面に現れない心の傷を残すことになるからだと考えている。このことからディケンズは、この監獄に監禁されることは人々に消し難いトラウマを残すと考えていたと思われる。

2. *A Tale of Two Cities* に見られる影響

ディケンズは、この東部重罪監獄訪問によって、*A Tale of Two Cities* のマネット医師創造に関するアイデアを得たと推察できる。⁵ ディケンズは、囚人の状態を「彼は生きながらにして葬られた人間となるのだ。そして緩慢な月日が何年も流れた後に掘り起こされるのだ。その間、責め苛む不安と恐ろしい絶望以外には、全てのものに対して死んだ人間となるのである」(101)と描写している。この描写は、18年間幽閉され生き埋め状態であったマネット医師の描写に酷似している。ディケンズはまた、ある男が監禁状態の中、絶望の淵に投げ込まれ、「私に何か仕事をください。さもないと狂ってしまう！」(106)と懇願し、仕事を得、発作的に作業に打ちこむ姿を見る。さらにディケンズは、子供たちや妻の夢を見るが、彼らは死んでしまっているか、あるいは自分を見捨ててしまっていると確信している男の姿を見る。ディケンズは、心理学的見地から、「心の病を専門に研究してきた人たちは、皆知り尽くしていることだが、人の性格全体を変えてしまい、その適応力や抵抗力を全て打ちのめしてしまうような極度の抑圧と失意は、その人の心の中でずっと作用し続けている可能性があり、まだ今のところ自己破壊にまで達していないにすぎないのかもしれないのである」(109)と述べている。さらにディケンズは、酒に溺れ身を滅ぼしかかっているのを自らを独房監禁してくれと懇願し、監禁される男の姿を描写している。彼は生業としている靴屋の仕事を毎日しながら、ほとんど二年間監禁状態に置かれる。二年が過ぎる頃、彼の健康が衰え始めたので、ときには庭で働いた方がいいと医者は勧める。彼は医者勧めに従い、ある夏の日、庭で穴を掘っていた。とそのとき、外壁の門がたまたま開けられたままになっていて、男は壁の向こうによく記憶しているほこりっぽい道路と、陽が照りつけている野原を見る。その通路は、通り抜け自由の通路であった。光の中の輝かしい光景を見、彼は無意識の本能で、鋏を投げ捨て、走り出し、二度と振り返ることはなかった。この男の話は、たとえ監禁状態にいても無意識に希望を見出そうとする人間の本能を示している。

American Notes のいくつかの例は、*A Tale of Two Cities* において監禁状態の後ルーシ

一に希望を見出したがトラウマが解消されず、再び元の状態に逆戻りマネット医師を描き出す際、アイデアとして用いられたと考えられる。

マネット医師は、フランスのボーヴェー(Beauvais)の医師だったが、サン・テヴレモンド(St. Evrémonde)侯爵兄弟の秘密(弟が農民の娘をレイプし、娘も弟も死んでしまったこと)を知ったため、バスティーユ(Bastille)監獄に幽閉されていた。マネット医師の場合、18年に及ぶ監禁状態の後ずっと自身の秘密を心の中に隠し持った状態にある。テルソン(Tellson)銀行のジャーヴィス・ロリー(Javis Lorry)はドーヴァーの宿屋でルーシーに会い、彼女の父親マネット医師は死んだと思われていたが実は生きていて、バスティーユに投獄されていたが今度釈放された、と告げる。今やパリで昔の召使、ドファルジュ(Defarge)夫妻の家に引き取られたマネット医師は、かつてイギリス人の妻と娘がいたことを忘れたかのように、自身を精神的監禁状態においやり靴つくりで没頭している。ディケンズは、マネット医師が自身を閉じこめ、部屋に鍵をかけている心理状態をドファルジュに語らせている。ロリーに鍵をかけている理由について聞かれたドファルジュは、「閉じこめられたままで、何十年と暮らしておいでなすったんだからね。あけっ放しにでもしたら、こわがって気が狂って、我と我が身をずたずたにして引きむしって死んでおしまいになるかもしれねえ」(35)と言う。⁶

ドファルジュはマネット医師の心理的衝撃を心配している。彼の説明は、バスティーユの牢獄の暗い影がマネット医師の心をおおいつくして、二度と同じ目に会いたくないという恐怖心を暗示している。このようなマネット医師は、長い間精神的に死んだようになっているが、彼の状態は娘が彼の目の前に現れることによって変化する。娘が「おじさま、おじさまのお苦しみはもうおしまいになりましたのよ。わたしはね、おじさまをお迎えに来ましたの。そしてこれからイギリスへ行って、二人で楽しく平和に暮らしましょうね」(44)と言い、父親の混乱した心理状態に入り込むとき、父親は激しくすすり泣き、「嵐の後に来る静けさ、『生』という嵐が最後に行きつかなければならない休息と静寂という、いわば人間性についての表象」(45)の中にぐったりとなる。

フィリップ・コリンズ(Philip Collins)が指摘しているように、作品において父親と娘の再会を復活を象徴するできごとととらえることができるが(Collins 133)、マネット医師は、娘との再会后、自身のトラウマにより元の状態に戻ってしまう。第2巻第10章でダーネイがルーシーと結婚したいという意志を伝え帰ったとき、マネット医師は思い出したかのように、靴つくりを始める。このことは、マネット医師がダーネイに娘を奪われ、また元の孤独な状態に戻ってしまうのではないかという不安を表している。ディケンズが第2巻第4章でバスティーユの牢獄の暗い影を追い払う力を持っているのはルーシーだけであると説明し、彼女の存在を「あの不幸の前の彼と、今不幸を越えてしまった彼をつなぐ黄金の糸と言ってもよかった」(74)と表現しているように、ルーシーはマネット医師にとって精神的「生」に必要不可欠な存在であるからだ。マネット医師の願望は、家庭的な幸福と関連している。なぜならば、第2巻第17章で娘の結婚式の前夜牢獄にいたときのことを思い出し、

「娘がふと独房を訪れてきて、はるか牢獄の外の自由な世界へ私を連れ出してくれるような気がしたのだ」(180)と語り、結婚して暮らしている自分の家へ案内してくれることを想像した、と言っていることにより、マネット医師が永続する家庭的な幸福を求めていることは明らかだからだ。

マネット医師がルーシーに救いを見出すことは、ディケンズの自伝的部分を考慮するとき、かつて収入のため靴墨工場に置いておこうとした母親に見捨てられたように感じたディケンズが、作品の中で自身のかつての願望をかなえようとしているかのようなのである。このように考えるとき、マネット医師は、ディケンズ自身のかつての心理から生み出されていると言えるかもしれない。

A Tale of Two Cities において、マネット医師の心理状態が彼の過去とともに揺れ動き、不安定な状態にあることは、ダーネイとルーシーの結婚式の後、マネット医師が靴つくりに没頭していることにより明らかである。心配したロリーが別の人間を想定し、マネット医師の状態に関する助言をマネット医師本人に求める。ロリーがある病人が精神的ショックのようなものにより発作を起こしているが、その原因は何かと尋ねると、マネット医師は、「昔何かその病気の原因になった思い出の記憶があつて、それがまた異常な強烈さでよみがえったというのだろうね。つまり一番思い出したくない想像だがね。これがまた強烈な鮮明さで生き返ってきたというのかな。おそらくね、その男の心には、もともとその連想が生き返ってきやしないかという恐れ——たとえばある条件のもとで——いや、もっと言えば、ある特定の場合にだねえ——で、そういう恐れがずっと以前から潜んでいたんじゃないかな」(102)と言う。マネット医師は、「頭の混乱を指先の混乱によってすり替えるというわけだねえ。まただんだん慣れてくるとね、心に受ける手のこんだ苦痛を巧みに手先の器用さでごまかすというわけさ」(194)と病人の仕事について説明する。

このようなマネット医師の症状は、精神医学における PTSD の特徴的症狀である「再体験」と「回避・麻痺」を示していると考えられる。「再体験」は元のトラウマ体験が何度も繰り返し蘇ることを表し、「回避・麻痺」とは再体験を引き起こすような状況を避けたり、感覚や感情を鈍化させることで苦痛を避けたりする反応である。これらの症状がマネット医師に見られる。マネット医師の症状は、自分が娘と再会する前の孤独な状態に再び置かれるのではないかという不安と関係がある。マネット医師は、ずっと心の中の秘密を隠し持った状態であったが、マネット医師の心の秘密は、ドファルジュがバステューユ襲撃の際、暗い地下牢である北塔 105 番の壁に A. M. というアレグザンドル・マネットのイニシャルと「哀れなる医師」という文字を読み取ることにより明らかとなる。ドファルジュは、バステューユ攻撃軍の砲手をつとめていたとき、マネット医師が監禁されている独房を調べ、マネット医師自筆の書類を見つける。この書類が法廷で読まれ、マネット医師が投獄されていた理由がはつきりする。マネット医師の文書は、アルバート・ハッター(Albert Hutter)が指摘しているように、彼の精神的外傷の記憶ともいべきもので、ダーネイの二回目の裁判のクライマックスで全体のプロットに関する重要なできごとをよみがえらせる

ものである(Hutter 91)。

1757年にマネット医師はパリ郊外の家と呼ばれ、狂気の若い女と瀕死の若い男の看病をさせられる。女は若い人妻であったが、サン・テブレモンド侯爵家の弟によって凌辱され、女の弟がそれを怒って侯爵に決闘をいどみ、重傷を負う。男は死に、数日後女も死ぬ。後にマネット医師は誘拐され、侯爵の命令で幽閉される。

「1767年12月31日夜囚人アレクサンドル・マネットは、その耐え難い苦悩の中にあつて、彼らと彼らの子孫をその最後の末裔にいたるまで、断固としてここに糾弾する」(315)という部分が読まれた後ダーネイは死刑判決を受ける。マネット医師にとっての不幸は、自分の愛娘の夫が自分が糾弾した貴族サン・テブレモンド家の一員であることだ。

マネット医師はジレンマ(dilemma)にさらされる。マネット医師の状況は、娘がダーネイと結婚しなければ生じなかった状況であり、ディケンズは娘の結婚において生じたマネット医師の苦悩を描いている。ダーネイ救出の見込みが絶望的になると、マネット医師は、「なんとかあの靴を仕上げなくちゃならんのだ」、「仕事をくれ」、「哀れなこのひとり者をいじめないでくれ」(325)と言い、屋根裏部屋以来のことが、残らずすべて一瞬の空想か、それとも夢であったかのように、ドファルジュが世話をしていたときの姿に戻っていく。マネット医師の様子は、家庭的幸福を期待している状態から、過去のトラウマのゆえに、精神面における「死」あるいは「生き埋め」の状態に逆戻りしていく様を示している。

長く独房生活を送り、「娘がふと独房を訪れてきて、はるか牢獄の外の自由な世界へ、わたしを連れ出してくれるような気がしたのだ」(180)とかつて語っていたマネット医師は、*Little Dorrit*でウィリアム・ドリットが娘のエイミーに精神的に依存しているがごとく、娘のルーシーに依存していると考えられるが、マネット医師の願望は、家庭的幸福と密接な関係がある。かつて家族から離れ、靴墨工場に通っていたディケンズもまた、家庭的幸福を求め続けていたと考えられ、マネット医師の描写に自身のかつての姿を投影した可能性がある。

結び

以上、ディケンズと精神的外傷について考えてきたが、ディケンズは *Little Dorrit* と *A Tale of Two Cities* における父親と娘の関係を描き出すに際し、靴墨工場から母親に救い出して欲しかったというかつての願望を思い出し、自身の思い出とそのときの心理状態を作品創造に用いているのではないかと考えられる。エドモンド・ウィルソン(Edmund Wilson)は、靴墨工場における経験がディケンズが生涯苦しむことになる精神的な外傷を作り出したと考え、靴墨工場の記憶が突発的に蘇ることを神経症的徴候と考えている(Wilson 7)。ウィルソンが指摘しているようにディケンズの精神的な外傷は、彼の生涯に多大な影響を与える一方で、彼の作品に多大な影響を与えている。ディケンズは、アメリカ旅行の際、フィラデルフィアの東部重罪監獄を訪れることにより、監禁状態が人間心理に与える影響を確認

すると同時に、自身のかつての心理を思い出し、それを作品に反映させた、すなわち、経験と文学表現を有機的に結びつけ、文学に昇華させた、と考えられるだろう。

注

* 本稿は、欧米言語文化学会関西支部第 22 回大会（於同志社大学、2009 年 4 月 2 日）での発表原稿を加筆修正したものである。

- 1 急性 PTSD の場合、積極的な治療が効果をもたらす場合がある。慢性 PTSD の場合、長期間の強力な治療を必要とすることもある(Foa, Davidson, Frances 26)。
- 2 Charles Dickens, *Little Dorrit* (New York: Oxford UP, 1991), p.97. 以下、引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、小池滋訳『リトル・ドリット』（筑摩書房）を参考にした。
- 3 監獄の改良者ジョン・ハワードは、1776 年月ウォーウィック(Warwick)の監獄に 33 人の重罪犯人と 24 人の債務者が収容されていたが、10 月にはたった 7 人の重罪犯人と 22 人の債務者しか収容されていないことを知った。ロンドンには、大きな監獄があったが、囚人は入りきらないほど多かった。最も重要なロンドンの監獄ニューゲイト(Newgate)は、18 世紀後半には、300 人ほど重罪犯人を収容していた。ロンドンにはフリート(Fleet)監獄やマーシャルシー監獄のような債務者のための監獄もあった。債務者たちは、長く滞在する監獄の住人として重罪犯人以上の割合を占めていた(MacGowen 73)。
- 4 Charles Dickens, *American Notes and Pictures from Italy* (New York: Oxford UP, 1991), p.99. 以下、引用文はこの版により引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、伊藤弘之、下笠徳次、隈元貞広訳『アメリカ紀行』（岩波文庫）を参考にした。
- 5 シーン・C・グラス(Sean C. Grass)は、ディケンズの作品の中で、マネット医師の描写ほど変わり果てた囚人の本質を描写しているものはない、と述べている。またグラスは、マネット医師の人物描写のほとんどが東部重罪監獄のできごとに基づいていると考えている(Grass 68)。
- 6 Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (New York: Oxford UP, 1991), p.35. 以下、引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、中野好夫訳『二都物語』（新潮社）を参考にした。

Works Cited

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.
- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. London: The Macmillan P, 1994.
- Dickens, Charles. *American Notes and Pictures from Italy*. New York: Oxford UP, 1987.
- . *A Tale of Two Cities*. New York: Oxford UP, 1991.
- . *Little Dorrit*. New York: Oxford UP, 1991.
- Grass, Sean C. “Narrating the Cell: Dickens on the American Prisons”, *JEGP* Vol.99. No.1. Champaign: The U of Illinois P, 2000.
- Hutter, Albert. “Nation and Generation in *A Tale of Two Cities*”, *Critical Essays on Charles Dickens’s A Tale of Two Cities*. Ed. Michael A. Cotsell. New York: G. K. Hall & Co., 1998.
- MacGowen, Randall. “The Well-Ordered Prison England, 1780-1865”, *The Oxford History of the Prison*. Ed. Norval Morris, David J. Rothman. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker & Warburg, 1970.
- Wilson, Edmund. *The Wound and the Bow*. Athens: Ohio UP, 1997.
- 川澄英男、『ディケンズとアメリカ—19世紀アメリカ事情』、彩流社、1998.
- ストロロウ、ロバート・D、『トラウマの精神分析—自伝的・哲学的省察』、和田秀樹（訳）、岩崎学術出版社、2009.
- フォー、エドナ・B、デイヴィッドソン、ジョナサン・R・T、フランシス、アレン、『PTSD』大野裕、金吉春（監訳）、アルタ出版、2005.

【出典】『近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）』第1巻第2号、近畿大学、2011年3月31日、153-166頁。